

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32601

研究種目：新学術領域研究（研究領域提案型）

研究期間：2018～2022

課題番号：18H05510

研究課題名（和文）日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明

研究課題名（英文）Deciphering History of Japonians based on comparison and analyses between Japanese and concerned languages

研究代表者

遠藤 光暁（Endo, Mitsuaki）

青山学院大学・経済学部・教授

研究者番号：30176804

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 37,800,000円

研究成果の概要（和文）：全体としてはアジア・アフリカ(AA)諸言語の言語地図を編み、日本語の諸言語特徴を定位した。動植物については遺伝学・考古学とのコラボを行った。格標示については日本語方言で先行していた地理的研究とAA諸言語の比較を行った。遠藤は日本列島と朝鮮半島における7世紀以前の漢字音訳の音価と意味の解読を進めた。狩俣は琉球語の系統樹を検証し、語彙による集団遺伝学の有効性を確認した。木部は日本語諸方言の格標示体系やアクセント体系の地域差を調査し、古代日本語の再構築の研究を行った。風間は日本語類型論の集大成となる単行本を刊行し、アルタイ型言語の類型についても新知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本において言語学がこれほど系統的に遺伝学・考古学とコラボを行ったのは初めてのことであり、日本語という個別言語について時空間の定位と形成過程を跡付けるという課題に真剣に取り組むことができた。通常8世紀の記紀万葉以降から考察される日本語の歴史について、それを遙かに遡る時代の人類集団の分岐・混成・移動に関する最新の研究に接し得たのは大きな刺激となるものである。言語学側からもアジア・アフリカ地域および日本本土・南西諸島にわたる地点密度の高い地理的な系譜を与え、また現在の日本語話者の祖先は5000年くらい前ならば出発時から日本語を話していたという強力な視点も当初から提示していた。

研究成果の概要（英文）：We have compiled the Linguistic Atlas of Asia and Africa, with an elaborate chapter on the linguistic features of the Japanese language. For case marking, comparisons were made between Asian and African languages based on extensive geographical research on Japanese dialectology. Endo deciphered the sounds and meaning of the Chinese characters before the 7th century AD in the Japanese Archipelago and Korean Peninsula. Karimata examined the validity of population genetics by studying the building and evolution of the complex vocabulary system of the Ryukyuan language using phylogenetic trees. Kibe investigated areal differences of accent systems and case marking among Japanese dialects. She also presented her study on the reconstruction of the ancient Japanese language. Kazama has published a comprehensive work on Japanese typology, also contributed his findings on the typology of the Altaic type languages.

研究分野：言語学

キーワード：集団遺伝学 言語類型論 アルタイ型言語 歴史言語学 格標示形式の地域差 アジア・アフリカ諸言語 日本語方言 系統樹

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

日本語の起源については、周辺のアジア諸言語と結びつける試みが明治以来百年ほど続けられてきたが、諸学者の懸命の努力にも関わらず定説はなく、系統論的には孤絶した言語であるとするのがふつうである。一方、日本語内部の諸方言の形成過程や文献言語史の面では着実な研究が多く蓄積されてきている。

琉球語は日琉祖語の研究に重要な役割を果たすと考えられてきたが、一部の琉球語と奈良期日本語の少数語彙による比較研究だけが行われてきた。九州方言との関係解明も重要だがほとんど研究されていなかった。現在狩俣が陣頭に立って進行中の琉球語の言語系統樹の研究に九州方言を含む日本語諸方言のデータを加え日本語諸方言が列島に拡散し形成された過程を検討する。

また、琉球諸語と日本語諸方言は、現在ではお互いに通じないくらい違いが大きいですが、両者が同一系統関係にあることは、服部四郎『日本語の系統』(岩波書店、1959)以来、学会の定説となっている。また、九州方言は日本語方言の最南端に位置づけられ、鹿児島県奄美大島以南の言語が琉球諸語に属するとされてきた(東条操『日本方言学』吉川弘文館、1953など)。しかし、近年は九州方言と琉球諸語の関係がもう少し近いものである可能性が指摘されている(五十嵐陽介、平子達也「肩・種・汗・雨」と「息・舟・桶・鍋」がアクセント型で区別される日本語本土方言 佐賀県杵島方言と琉球語の比較 (第30回日本音声学会全国大会発表要旨、2016))。これを受けて、本部はこれまでの九州方言の研究実績を生かし、九州方言と琉球方言の近縁関係について解明する。具体的な内容としては、九州、及び東北等の日本語諸方言のデータベースを整備し、これら进行分析することによって、九州方言と琉球諸語の関係、日本語諸方言と琉球諸語の関係を明らかにする。

以上の日本語(Japonic)内部の詳細な地理分布と系譜関係・相互関係に関する実証的な研究を基盤としつつ、百年来の懸案であるユーラシア諸語との関係についても新たな探索を進める。

まず、日本列島内の諸言語の一つであるアイヌ語と日本語の通時的な関係に関する研究は、これまで比較言語学的手法で行われたものがほとんどであり、類型論に基づくものはわずかである。中川(2009)は、接頭辞を多用するアイヌ語の語構造と日本語と同じSOV型の語順との間に、類型論的な不整合があることに着目し、アイヌ語と日本語との接触はそれほど古い時代に遡るものではなく、むしろ古い時代の南方のVO型言語との接触の可能性に言及した。また2014年のヘルシンキ大学における発表では、アイヌ語の動詞数に注目し、これがユーラシア大陸では中央シベリア、コーカサスなどにのみ点在する文法的特徴であることから、ユーラシアにルーツを持つとしても、非常に古い特徴を有している言語であることを示唆した。本研究では日本周辺の諸言語との類型論的対照研究を通じて、アイヌ語がそれらとどの程度文法的に乖離しているかを示し、その一方で言語地理学的な分析により、それらの言語との接触を通じて、どのような表層的な類似性をもたらしたかを解明する。

次いでユーラシア大陸部のチュルク諸語、モンゴル諸語、ツングース諸語からなるアルタイ諸言語は、朝鮮語とともに日本語と典型的によく似ていると言われており、その言語類型として「アルタイ型言語」が提唱されている。しかし細部にわたってみてゆくとその中には変異も多く観察される。一つの典型的特徴は、必然的に内的関連をもって他の特徴と相関する。しかしその範囲とメカニズムは十分に解明されていない。この問題については風間(2014)でその語の研究の方向性を提案したが、こうした日本語的な文法類型とは何か、を解明することが具体的な目的である。

ごく近年になってアジア全域の各語族をまんべんなく含む「アジア地理言語学」の領域が飛躍的に進展した。これは遠藤が提唱して30名ほどのアジア諸言語の研究者によってこの3年来東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)で行われた共同研究プロジェクトであり、「太陽・イネ・鉄・風・乳・名詞の数え方・声調アクセント・雨が降る」の8言語特徴につきアジア全域の約2000地点(声調アクセントについては約4000地点)の密度で言語地図が作成された。更に本計画の今後5年間の研究により、A03班が研究するネズミなどの人類と付随して移動する動物や粟・ヒエ・キビなどの雑穀、在来種のイモなどの植物、家族構造を反映する親族名称などの語彙とともに音韻・形態・構文論的な特徴も引き続き取り上げて日本語を取り巻くアジア諸言語における高精細度・大画面の言語地理学的研究を推進し、それらと日本語諸方言の間の連続性・非連続性を個別の言語特徴ごとに具体的にきめ細かに跡づける。

また、大陸部の言語でもっとも日本語と類似しているとされているのはいわゆる「高句麗語」であり、恐らく借用による「熊」等日朝共通語彙も含め、朝鮮半島と日本列島の最古期の漢字音訳資料の解読を進める。

## 2. 研究の目的

A) 日本語内部の地域差を特に琉球・九州に重点を置いて検討する。数量的方法により系統樹を作成し、形成過程を推定する。

B) 日本語と周辺言語の関係について言語類型論の特徴に重点を置いて検討し、早期の類縁関係

を探索する。

C) 日本語諸方言内部における漢語等の借用語の検討や文献言語史との連携により、変化過程を高精度で求める。

D) 日本語を中心としたアジア諸言語におけるイネ・雑穀・いも、ネズミ、などの人類集団と共に移動する動植物名、親族名称の体系、姓・地名などを地理言語学的手法によりアジア全域の地理分布を求め、解釈を与える。

E) ゲノム人類学・考古学・人口論などの知見と上記を突き合わせて、モノや集団の移動のプロセスを解明する。

F) 研究集会を活発に開催して国内外の諸言語の研究者および遺伝学者・考古学者の間の緊密な交流を促進する。

### 3. 研究の方法

全5年度を通して本計画はアジア・アフリカ(AA)全域を視野に収めるといふ、人文系では比較的稀なビッグサイエンスとしてのマクロなパースペクティブを持つのと同時に、個別の言語特徴にもとづく数百・数千地点のミクロな地理分布や変化過程も追跡するという両側面を持つ。また、国内外の様々な研究機関に分散する研究者が一堂に会して緊密な共同研究を行うことも目指す。以下ではB02班全体としての計画と分担者別の計画を記す。

B02班全体(研究代表者が様々な研究者と協力しつつ実施)

1) 日本語による国内研究者を主とした研究集会を1回、海外の研究者も含む英語による研究集会を1回開催するのを計画していたが、2020年度からはコロナによりオンラインによるAA地理言語学の研究集会を年に2回英語で開催した。初回の国内集会では、研究計画の全体を確認し、重点的に琉球語・九州方言・アイヌ語・ツングース語・アジア地理言語学のこれまでの研究を概観する。また、英語による国際研究集会ではアジア地理言語学プロジェクトによって既に得られた項目について遺伝学者や考古学者など関連領域の研究者も招いてその知見を交流する。AA地理言語学については、本計画のメンバーだけでなく関心を持つ研究者や院生・一般にも公開した。

2) 日本の地名や姓の歴史的・地理的研究はこれまでも盛んに行われているが、縄文文化・弥生文化などと一層系統的に関連付ける研究に着手する。これまでも同じ地形を指すのに東日本では「沢」、西日本では「谷」と呼び、「谷」は朝鮮半島の地名とも関連があることが分かっている。さらに苗字についても「沢」を含む姓は東日本、「谷」を含む姓は西日本に分布する傾向が強く、こうした研究を組織的に行う。姓については特に男性の人類集団の拡散と緊密に関連しており、遺伝学からの知見との比較が特に実り豊かであると期待される。また朝鮮や中国の姓や地名の研究も行った。

3) 第4回アジア地理言語学国際会議(於インドネシア大学)、香港理工大学の王士元教授が主宰する第10回進化言語学会(於南京大学)、海外共同研究者でもあるマックスプランク人類史科学研究所のRobbeets 研究員が主催した言語学・考古学・遺伝学学際的ユーラシア横断国際会議(マックスプランク人類史科学研究所)などの各種国際会議においてA01班研究代表者の斎藤成也教授などとともに言語学・考古学・遺伝学に跨る研究成果を発表した。

#### 分担者別

・遠藤：古代の朝鮮半島と日本列島の地名・人名・官職名の漢字音訳の解読を進める。考古学や遺伝学の近年の進展もフォローしつつ、音訳字の字面だけでは知ることのできないそれぞれの地域の歴史的背景や人類集団の異同についての知見を梃子にして音声と意味を浮かび上げさせる。

・狩俣(対象としては琉球、方法としては数量・統計的手法に比重を置く)：琉球列島800地点350項目で作成する系統樹と100地点1100項目で作成する系統樹に、鹿児島を中心にした南九州の地点の方言データを加え、九州方言と琉球語をまとめた系統樹を作成し、九州方言と琉球語の系統関係を検討する。琉球語と九州方言の共通の単語が奄美方言から与那国方言までのどの範囲に分布するかを割り出し、琉球語内の地域差に九州方言がどのように関与しているか、九州方言を含む日本語諸方言の分岐と系統関係を解明する。

・木部(九州の言語の体系的記述に比重を置く)：琉球諸語と日本語諸方言の音韻、文法、語彙システムを比較するためのデータベースを構築する。初年度の30年度は、九州地域(主に鹿児島、熊本、宮崎といった南九州)を中心としてデータを収集し、データベースを整備する。

・中川：日本語とその周辺言語に関する言語類型論的分析について、研究資料を収集するとともに、他の共同研究者から情報提供を受け、それらから抽出されるそれぞれの言語の特徴について、アイヌ語との対照を行う。特に人称表示に関しては、アイヌ語は日本語よりむしろツングース諸語と共通する特徴を持つことが予想される。その点を重点的に分析する。

・風間：初年度の30年度は、まず近年より精度を増し、量的にも十分になって来た「アルタイ型言語」の文法記述の情報を、各類型的な指標ごとに整理・入力しデータベース化する。不足している情報に関しては、専門の研究者にも依頼して現地調査その他の方法により一次資料を収集する。

#### 4. 研究成果

全体としては遠藤光暁が代表者であった東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究とのコラボにより、アジア・アフリカ地域の全語族を網羅する地理言語学的研究の成果を単行本としてまとめ、*Linguistic Atlas of Asia*, ひつじ書房, 2021年; *Linguistic Atlas of Asia and Africa*, Vol.1, 日本地理言語学会, 2022年; *Linguistic Atlas of Asia and Africa*, Vol.2, 日本地理言語学会, 2023年として刊行済であり、*Linguistic Atlas of Asia and Africa*, Vol.3, も2023年後半には刊行予定である。第一のものはアジア全域の全語族につき2000地点ほどの密度で「太陽・稲・乳・風・鉄・計数法(類別詞)・声調とアクセント・雨が降る」の8項目に対して言語地図を描画したものであり、第二のもの以下は更にアフリカも含み、「鼠・鶏・馬・犬・狼・熊」など人類集団と関係の深い動物や「小麦・キビ・アワ・ヒエ・里芋・山芋」などの穀物類および「子音体系・兄弟名称体系・格標示・数詞体系」などの類型論的項目について扱っている。この基礎の上に立って日本語をこうした言語特徴につききめ細やかにAA諸語の中に位置づけ、例えば穀物類については小麦は西アジアから入り、稲は東南アジアから入り、キビ・アワ・ヒエについては東北アジアにおいて栽培が開始され、こうした農耕文化複合が東北アジアにおいて既に生じているのに呼応して、言語面の呼称がそもそも存在するものもそのような地域に限られることを明瞭に示した。動植物についてはA03班によりゲノムのアジア全域にわたる系譜と地理分布が明らかになっており、研究会を共同開催して一般にも公開した。もともと英語だけで研究会を行っていたため、コロナ期になって全世界的にテレビ会議システムが瞬時に普及するにつれ、アジア・アメリカ・オセアニアの諸外国の参加者もあり、国際的な研究集会を居ながらにして継続することができた。動植物については更に遺伝学者とともに単行本の報告書の刊行を企画中である。また、格標示については分担者の木部暢子が国立国語研究所において行っていた日本語方言における系統的な研究を参照しつつ、そのごく一部ではあったが同じ様式でAA諸言語における地理分布とも対比した。日本では日本語研究者とそれ以外の言語の研究者が緊密なコラボをすることが比較的少ないが、本新学術領域科研ではその面でも貴重なパイロットケースを実践したこととなる。

分担者ごとの研究成果としては、遠藤光暁は日本列島と朝鮮半島の最古期漢字音の研究に従事した。日本語史では通常8世紀初の記紀万葉から文献時代が始まり、それ以前は3世紀中頃のいわゆる『魏志倭人伝』中の日本語音訳や金石文に少数の例しかなかった。こうした7世紀以前の資料は絶対年代について言うと中国語音韻史では5世紀以降の中古音期に属するものが多いにもかかわらず、反映するのは実際には上古音期の特徴が多くみられることが以前から知られていた。そして上古音研究は近年著しい進展を見せた分野であり、遠藤は稲荷山鉄剣銘文などに新学説に対応する特徴が存在することを見出した。また日朝最古期漢字音による地名・人名・官職名の解読を進め、上古音を反映する古い側面を持つ一方で、音節末尾音の弱化・脱落が著しいといった革新的側面も持つことを明らかにした。これによりこれまで未解読だったさまざまな語の意味が解釈可能になり、弥生時代に属する紀元前4世紀頃の時代の地名が本邦に残されており、その出自についても推定できるようになった。朝鮮最古の歴史書『三国史記』に含まれる音訳語を地理志のみならず全書に散見するものも含めて研究し、これまで不明とされていた「百濟」の部分の地名が音韻的な類似に基づき白村江の戦い以降に改定されたことや「新羅」地名の改定が意味・音声の類似とは無関係になされているものが多いことを明らかにした。2022年後半からは韓国にも実地踏査することが可能になり、地形やその地域の全体的な特性からして地名の音義の由来が推定できることに気が付き、『三国史記』の併記地名に依らない語源解釈を与えることのできる場合があることを具体的に発見した。日本列島の地名にもそれと共通する一連の特性が見出され、人類集団の移住の痕跡を具体的に追うことを可能にした。

分担者狩俣繁久は琉球諸語と九州方言の重層的な言語史と系統関係の解明を目指して、研究協力者の木村亮介(琉球大学医学部・ゲノム人類学)、岡崎威生(琉球大学工学部・数理統計学)、和智仲是(琉球大学熱帯生物圏研究センター・生態学)と協働研究を行って集団遺伝学を取り入れた言語研究を進めた。琉球諸語と九州方言の資料(85地点×3250項目)を集団遺伝学的手法で単語を構成する音素を素性に分解して数列化して系統ネットワーク図やADMIXTUREを描き、琉球語研究のこれまでの成果に照らしながら、系統ネットワーク図とADMIXTUREの結果を地図上にプロットした言語地図等を検討材料に加えて検証し琉球諸語の系統関係を解明する研究法として音韻を指標にした集団遺伝学が有効であることを確認した。南琉球語の中の宮古語と八重山語が従来説よりも近い関係にあり、逆に与那国語がこの2者から離れていること等を導いた。動詞形態論の根幹をなすアスペクト・テンス体系と、稲作に関わる稲、米、鎌等の基礎語彙について北琉球語と南琉球語と九州方言を比較し、琉球諸語の南北差が九州から琉球列島への人の移動の波が2回あったことに由来することを導き出した。

分担者木部暢子は全国47都道府県の方言談話資料よりなる『諸方言コーパス』(2023年3月現在で64地点、91時間搭載)を構築し、日本語諸方言の言語システムの比較を行い、格標示システムや音調システムに関して以下のような研究成果をあげた。格標示システムについては、従来、日本語は主語や目的語を機能語(助詞)で標示する膠着語であるとされてきたが、古代日本語や現代諸方言では必ずしも助詞による主語や目的語標示が行われない。『諸方言コーパス』を利用して各地の格標示形式を統計的に分析した結果、格標示システムに明確な地域差があることが明らかとなった。この成果は、Nobuko Kibe, et al. “Corpus-based study of Japanese dialects: Regional differences in accusative case marking system,” (Proceedings of Methods XVI, 197-207, 2020)、

木部暢子・竹内史郎・下地理則[編]『日本語の格表現』(くろしお出版,310頁,2022年)等で公表した。音調システムについては、無型アクセント体系が古層の保存である可能性が残るものの、全国の有型アクセント体系は祖形に有型アクセント体系を想定することにより生じることを明らかにした。この成果は、木部暢子「日本語方言の多様性 - アクセントの地域差 - 」(『東京外国語大学 国際日本学研究 報告』5,1-9,2019年)等で公表した。

風間伸次郎の研究成果は下記のとおりである。まず 2019 年のイエナ大学におけるシンポジウム “Transeurasian millets and beans, languages and genes” での A review of ‘Is Japanese related to Korean, Tungusic, Mongolic, and Turkic?’ (Robbeets: 2005) という題での発表では、ヤポネシアゲノムの一員として世界の日本語系統論研究に一つの立場を示すことができた。2020 年の成果(「アイヌ語はどの言語と似ているか - 対照文法の試み - 」『日本語の起源はどのように論じられてきたか - 日本言語学史の光と影』269-313. 東京:三省堂)では、アイヌ語の系統に対する考え方についての一つの立場を示すことができたのではないかと考えている。2021 年の日本言語学会第 163 回大会でのワークショップ「日本諸語の形成に関する総合的アプローチ-大陸倭語・八丈型基層語・アクセントの分布と機能の 3 つの観点から-」では、ヤポネシアゲノムにおける課題に言語学の立場から、また筆者の立場から現時点で可能な最先端の分析と考察を提示したものと考えている。2022 年には、筆者のこれまでの 20 年ほどの類型論的な日本語の位置づけと上記の言語学会での発表の内容をまとめた『日本語の類型』(東京:三省堂)を刊行することができた。他にはいくつかの一次資料のテキスト集を刊行した。東京外国語大学の『語学研究所論集』には、「受動表現」「ヴォイスとその周辺」「アスペクト」「モダリティ」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」の 10 のテーマについて、タタール語、チュヴァシ語、トゥバ語、トルクメン語、ハカス語、キルギス語、ウイグル語(いずれもチュルク諸語)の例文データを公開した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計80件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 27
2. 論文標題 モンゴル語文法研究ノート(3)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 81-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 13
2. 論文標題 アルタイ型言語の再帰表現について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 143-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎・新田志穂	4. 巻 27
2. 論文標題 ウイグル語：特集補遺データ, 受動表現, ヴォイスとその周辺, アスペクト, モダリティ, 他動性, 連用修飾複文, 情報構造と名詞述語文, 情報構造の諸要素, 否定、形容詞と連体修飾複文, 所有・存在表現	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 551-614
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤光暁	4. 巻 14
2. 論文標題 『三国史記』地名漢字の通用例に反映した清濁合流の地理分布	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 経済研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 遠藤光暁	4. 巻 73(4)
2. 論文標題 最古期日朝漢字音における末尾音の弱化・脱落	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 青山経済論集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 8
2. 論文標題 琉球諸語の仮名文字正書法の制定にむけて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 琉球アジア文化論集	6. 最初と最後の頁 1-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.26564/0002017893	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 22(1)
2. 論文標題 琉球語幸喜方言の擬声擬態動詞	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 4-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 6
2. 論文標題 語構成からみた幸喜方言の形容詞	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 琉球方言研究	6. 最初と最後の頁 251-262
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 3
2. 論文標題 沖縄語名護市饒平方言の焦点構造とモーダルな文のタイプ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シマジマのしまことば	6. 最初と最後の頁 116-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 3
2. 論文標題 宮古語の仮名文字表記法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シマジマのしまことば	6. 最初と最後の頁 207-246
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 3
2. 論文標題 宮古島市上野野原方言の動詞活用形調査の資料	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シマジマのしまことば	6. 最初と最後の頁 219-247
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久・島袋幸子	4. 巻 3
2. 論文標題 名護市饒平方言の動詞活用形 調査の資料	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シマジマのしまことば	6. 最初と最後の頁 134-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 狩俣繁久・島袋幸子	4. 巻 3
2. 論文標題 名護市久志方言の動詞資料	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シマジマのしまことば	6. 最初と最後の頁 159-186
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 12
2. 論文標題 東北アジアの諸言語を中心とする証拠性に関する対照研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 113-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 26
2. 論文標題 モンゴル語文法研究ノート(2)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 47-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 26
2. 論文標題 タタール語：特集補遺データ「受動表現」「ヴォイスとその周辺」「アスペクト」「モダリティ」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報 構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 557-648
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/117389	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 26
2. 論文標題 チュヴァシュ語：特集補遺データ「他動性」「ヴォイスとその周辺」「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「情報構造と名詞述語文」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 501-556
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/117388	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 26
2. 論文標題 トゥバ語：特集補遺データ「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 733-792
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/117392	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 26
2. 論文標題 トルクメン語：特集補遺データ「他動性」「ヴォイスとその周辺」「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「情報構造と名詞述語文」「連用修飾複文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 439-500
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/117387	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 26
2. 論文標題 ハカス語：特集補遺データ「ヴォイスとその周辺」「受動」「アスペクト」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 793-808
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎・日高晋介	4. 巻 26
2. 論文標題 ウズベク語：特集補遺データ「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 699-732
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎・アクマタリエワ ジャクシルク	4. 巻 26
2. 論文標題 キルギス語：特集補遺データ「受動表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 649-698
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/117390	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 24
2. 論文標題 モンゴル語の再帰接辞の機能について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 37-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/94734	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 24
2. 論文標題 (特集補遺)まえがき	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 63-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/100160	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 101
2. 論文標題 アルタイ諸言語における複数形式の定性について 日本語および朝鮮語との対照をつうじて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京外国語大学論集	6. 最初と最後の頁 17-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/95713	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 11
2. 論文標題 アルタイ型言語における「補助動詞」の分布について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 123-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 1
2. 論文標題 アルタイ諸言語における形容詞の名詞的用法について コーパスによる予備的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 津曲敏郎先生古稀記念集	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤光暁	4. 巻 13
2. 論文標題 山東方言軽声前変調の地理分布	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 経済研究	6. 最初と最後の頁 131-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34321/21864	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mitsuaki Endo	4. 巻 129
2. 論文標題 Geographical distribution of certain toponyms in the Samguk Sagi	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.201229	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 44
2. 論文標題 消滅危機方言の記述文法は誰のために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 琉球の方言	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 2020
2. 論文標題 見えなかったものを見るように - 琉球語文学としての諺研究の可能性 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 沖縄文化	6. 最初と最後の頁 471-487
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 7
2. 論文標題 生態学としての琉球語研究(1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 琉球アジア文化論集	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤光暁	4. 巻 6
2. 論文標題 中国各個語族中定語詞序類型的地理分布	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series	6. 最初と最後の頁 82-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤光暁	4. 巻 6
2. 論文標題 漢語及周辺語言中“南瓜”和“馬”兩個借詞的地理分布	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series	6. 最初と最後の頁 90-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mitsuaki Endo	4. 巻 7
2. 論文標題 Introduction	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mitsuaki Endo	4. 巻 12
2. 論文標題 Bidirectional Change in Tone: Evidence from Chinese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Keizai Kenkyu, Aoyama Gakuin University	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 8
2. 論文標題 言語から考える九州から琉球へのヒトの移動 - 語彙と文法から移動の時期を考える -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際琉球沖縄論集	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 5
2. 論文標題 言語接触がもたらした琉球語の南北差	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 5-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 42
2. 論文標題 沖縄語那覇方言の焦点助詞と情報構造	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 南島文化	6. 最初と最後の頁 101-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 6
2. 論文標題 一単語文から分節文へ - 人間の言語の特性と起源 (再考)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 琉球アジア文化論集	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 44
2. 論文標題 消滅危機方言の記述文法は誰のために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 琉球の方言	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 218
2. 論文標題 ことばから見た日本列島人の起源	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴博	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川裕	4. 巻 21
2. 論文標題 白沢ナベ口述 カムイユカラソレイパソレ：和人の若殿の物語	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 千葉大学 ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 155-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 21
2. 論文標題 ロシアへ中国へ、「アルタイ型」言語の正体を探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Field Plus	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 9
2. 論文標題 アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 41-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KAZAMA Shinjiro	4. 巻 13
2. 論文標題 On the internally headed relative clause in Altaic-type languages	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Asian and African linguistics	6. 最初と最後の頁 1-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 23
2. 論文標題 特集「否定、形容詞と連体修飾複文」まえがき	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 17-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 23
2. 論文標題 《データ：「否定、形容詞と連体修飾複文」》ナーナイ語・エウエン語・ソロン語	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 249-257
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 10
2. 論文標題 アルタイ型言語の語順特性およびそれと内的関連性を持つ諸特徴について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 17-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 119-12
2. 論文標題 消えゆく言語・方言を守るには	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 p.47-p.56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 96-1
2. 論文標題 疑問文の文末音調による系統内類型論の試み - イントネーション研究のために -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 p.3-p.13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 5
2. 論文標題 日本語方言の多様性 - アクセントの地域差 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究 報告	6. 最初と最後の頁 p.1-p.9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/92928	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 5
2. 論文標題 日本の危機言語・方言 - 奄美・沖縄の親族名称・親族呼称 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究 報告	6. 最初と最後の頁 p.10-p.19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/92929	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 5
2. 論文標題 対格標示形式の地域差 - 無助詞形をめぐって -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究 報告	6. 最初と最後の頁 p.20-p.32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/92930	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 5
2. 論文標題 奄美・沖縄の言語研究から - 奄美方言のエピデンシャリティ -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究 報告	6. 最初と最後の頁 p.33-p.46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/92931	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川裕	4. 巻 20
2. 論文標題 「アイヌ口承文芸テキスト集17 白沢ナベ口述 カムイユカラアテヤテンナ：六つ首の狐」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』	6. 最初と最後の頁 309-322
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤光暁	4. 巻 4
2. 論文標題 アジア地理言語学プロジェクト2015-2017概要	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 199-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mitsuaki Endo	4. 巻 8
2. 論文標題 “ It rains ” in Tai-Kadai	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Studies in Asian Geolinguistics	6. 最初と最後の頁 33-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mitsuaki Endo	4. 巻 4
2. 論文標題 Correlation between onset and vowel, and the principle of “ wider distribution ” as revealed in the	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Papers from the Fourth International Conference on Asian Geolinguistics	6. 最初と最後の頁 74-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤光暁	4. 巻 11
2. 論文標題 曲折調的誕生和消失	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 経済研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤光暁	4. 巻 11
2. 論文標題 山東方言二字組変調の地理言語学的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 経済研究	6. 最初と最後の頁 9^26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 5
2. 論文標題 言語接触がもたらした琉球語の南北差	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 5
2. 論文標題 言語接触からみた琉球語 - 琉球語の多様性の喪失 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語接触と日本語の未来	6. 最初と最後の頁 169 ~ 188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 5
2. 論文標題 The Linguistic Difference between Northern and Southern Ryukyuan from the Perspective of Human Movement	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Journal of Okinawan Studies	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 8
2. 論文標題 琉球語系統樹研究の方法と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際琉球沖縄論集	6. 最初と最後の頁 1-14.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 5
2. 論文標題 人間の言語の特性と起源 - 一語文から二語文へ -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 琉球アジア文化論集	6. 最初と最後の頁 185-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 43
2. 論文標題 沖縄クレオロイドの研究をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 琉球の方言	6. 最初と最後の頁 85 ~ 96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 1
2. 論文標題 琉球語の多様性と島嶼性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 島嶼地域科学という挑戦	6. 最初と最後の頁 119 ~ 130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 21
2. 論文標題 多良間方言の「中舌母音」はどんな音か	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 琉球アジア社会文化研究	6. 最初と最後の頁 .27 ~ 34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣繁久	4. 巻 4
2. 論文標題 音韻変化の体系性 - 音韻変化と音韻体系の再編 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 琉球アジア文化論集	6. 最初と最後の頁 111-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 20
2. 論文標題 トルコ語の -ki(n) とモンゴル語の -x との比較・対照 共時的・通時的両面からの検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ユーラシア諸言語の多様性と動態	6. 最初と最後の頁 191-225
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 1
2. 論文標題 アルタイ諸言語	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国北方危機言語のドキュメンテーション	6. 最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 1
2. 論文標題 ソロン語	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国北方危機言語のドキュメンテーション	6. 最初と最後の頁 101-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 1
2. 論文標題 第6章 語順と情報構造の類型論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語の格標示と分裂自動詞性	6. 最初と最後の頁 143-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 21-4
2. 論文標題 ロシアへ中国へ、「アルタイ型」言語の正体を探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Field Plus	6. 最初と最後の頁 ?
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 1
2. 論文標題 アイヌ語はどの言語と似ているか 対照文法の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語の起源はどのように論じられてきたか - 日本言語学史の光と影	6. 最初と最後の頁 ?
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 9
2. 論文標題 アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 41-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 13
2. 論文標題 On the internally headed relative clause in Altaic-type languages	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Asian and African linguistics	6. 最初と最後の頁 1-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 1
2. 論文標題 第6章 語順と情報構造の類型論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語の格標示と分裂自動詞性	6. 最初と最後の頁 141-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風間伸次郎	4. 巻 9
2. 論文標題 アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 41-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計30件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 19件）

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 日本語諸方言コーパスの構築と活用 パラレル音声コーパスの可能性
3. 学会等名 日本言語学会公開特別シンポジウム「データベースをつくる・つかう：課題と展望
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 配慮表現の地域差 日本語諸方言コーパス（COJADS）から
3. 学会等名 NINJALシンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 日本語音声のダイバーシティ - 日本の方言音声について -
3. 学会等名 日本音響学会2021年春季研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 遠藤光暁
2. 発表標題 Dong台語数詞的地理語言学研究
3. 学会等名 中国語言地理比較研究論壇（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 遠藤光暎
2. 発表標題 橫跨幾個語族的借詞兩例 “南瓜”和“馬”在中國境內語言中的地理分布
3. 学会等名 中央民族大学2019年中國民族語言地理語言學沙龍（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ENDO Mitsuaki
2. 発表標題 Geographical Distribution of Some Phonological, Syntactic, and Lexical Features of the Languages in China
3. 学会等名 52nd International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (國際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤光暎
2. 発表標題 中國境內語言音節開頭輔音系統類型的地理分布
3. 学会等名 第四屆語言類型學國際學術研討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤光暎，王萍
2. 発表標題 聲調感知的三個基本問題 載調單位、北京話上聲的本質特徵、曲折調的階段性
3. 学会等名 第11屆演化語言學國際研討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤光暁
2. 発表標題 早期日本漢字音資料研究
3. 学会等名 訳音対勘的材料与方法国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中澤光平 , 大槻知世 , 上村健太郎 , CARLINO Salvatore , 佐藤久美子 , 木部暢子
2. 発表標題 日本語諸方言における助詞との縮約形の地域差：COJADSに基づく分析から
3. 学会等名 日本方言研究会第108回研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KIBE Nobuko
2. 発表標題 Reporting on endangered languages and dialects in Japan: Their recording, conservation, and transmission
3. 学会等名 21st Biennial Conference of Japanese Studies Association of Australia（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 風間伸次郎
2. 発表標題 アルタイ型言語における「受身」の機能に関する対照言語学的研究
3. 学会等名 2018年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 風間伸次郎
2. 発表標題 モンゴル語の再帰接辞の機能について
3. 学会等名 日本北方言語学会第2回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 セリック・ケナン、木部暢子
2. 発表標題 Raising language diversity awareness in Japan through web-based open access application
3. 学会等名 The 6th International Conference on Language Documentation & Conservation (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nobuko Kibe
2. 発表標題 Intonational Variations at the End of Interrogative Sentences in Japanese Dialects
3. 学会等名 The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Works (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 日本語と琉球語の成立をさぐる - アクセントの比較対照から -
3. 学会等名 第72回日本人類学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nobuko Kibe
2. 発表標題 Accent systems in Japanese dialects
3. 学会等名 NINJAL International symposium (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 危機言語の記録・保存・復興
3. 学会等名 沖縄言語研究センター40周年記念シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nobuko Kibe
2. 発表標題 Intonational Variations at the End of Interrogative Sentences in Japanese Dialects: From the "Corpus of Japanese Dialects"
3. 学会等名 Special Session, LREC-2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 日本語の系統内類型論の試み
3. 学会等名 新学術領域・ヤポネシアゲノム・言語班2018年度第2回研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KARIMATA Shigehisa
2. 発表標題 Thinking about population movements from Kyushu into the Ryukyus from the point of view of language - a reflection on the movement on the basis of words and grammar
3. 学会等名 The 2nd NINJAL-UHM-SGRL linguistics workshop: Grammatical descriptions of endangered and understudied languages in East Asia and Beyond (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KARIMATA Shigehisa
2. 発表標題 “ The Possibilities of Phylogenetic Tree Studies in Ryukyuan Languages ”
3. 学会等名 Collaborative and Public Symposium “ Research Possibilities and Challenges for Linguistic Studies in the Island Regions ” (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 狩俣繁久
2. 発表標題 琉球列島への人の移動 2 回仮説の意味すること
3. 学会等名 新学術領域ヤポネシアゲノム言語班第2回研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mitsuaki Endo
2. 発表標題 Correlation between onset and vowel, and the principle of “ wider distribution ” as revealed in the changing process of the forms for “ rain ” in Tai-Kadai
3. 学会等名 Fourth International Conference on Asian Geolinguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuaki Endo
2. 発表標題 Time Series Maps of Tone in the Hebei Dialects of Chinese
3. 学会等名 9th CONGRESS OF THE INTERNATIONAL SOCIETY FOR DIALECTOLOGY AND GEOLINGUISTICS (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuaki Endo
2. 発表標題 Synopsis of the Project on Asian Geolinguistics 2015-2017
3. 学会等名 UNESCO International Conference "Role of linguistic diversity in building a global community with shared future: protection, access and promotion of language resources" (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Qi海峰・遠藤光暁
2. 発表標題 山東Ju県方言尖団音変異の初步考察
3. 学会等名 第10回演化語言学国際研討会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤光暁
2. 発表標題 曲折調の誕生和消失
3. 学会等名 第68回日本中国語学会大会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 遠藤光暁
2. 発表標題 山東方言両字組変調の地理語言学研究
3. 学会等名 漢語方言比較和地理研究論壇 ( 國際学会 )
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naruya Saito & Mitsuaki Endo
2. 発表標題 Origins of Yaponeseans from genetic and linguistic viewpoints
3. 学会等名 International Symposium: Transeurasian millets and beans, languages and genes ( 國際学会 )
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計26件

1. 著者名 Mitsuaki Endo et al.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 Linguistic Atlas of Asia	

1. 著者名 Mitsuaki Endo	4. 発行年 2021年
2. 出版社 アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 124
3. 書名 Consonant Series in Kra-Dai, Studies in Asian and African Geolinguistics, No.1	

1. 著者名 Mitsuaki Endo, Aika Tomita, and Ayaka Hirano	4. 発行年 2021年
2. 出版社 アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 69
3. 書名 Grammatical Relations in Kra-Dai, Studies in Asian and African Geolinguistics, No.2	

1. 著者名 木部暢子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 309
3. 書名 日本語諸方言の主語・目的語の格標示形式, 木部暢子・竹内史郎・下地理則 [ 編 ] 『日本語の格表現』	

1. 著者名 木部暢子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 丁寧表現形式「デス」の地域差 日本語諸方言コーパス (COJADS) から , 窪園晴夫・朝日祥之 [ 編 ] 『言語コミュニケーションの多様性』	

1. 著者名 木部暢子 [ 編 ]	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 地域文化の可能性	

1. 著者名 林由華・衣畑智秀・木部暢子 [ 編 ]	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 296
3. 書名 フィールドと文献からみる日琉祖語の系統と歴史	

1. 著者名 狩俣繁久、和智仲是、木村亮介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 296
3. 書名 「琉球諸語研究における方言系統地理学の可能性」、木部暢子・林由華・衣畑智秀共編『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』	

1. 著者名 風間伸次郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 309
3. 書名 言語類型論から見た日本語の格，木部暢子・竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格表現』	

1. 著者名 池田忍編中川裕分担	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 281
3. 書名 『問いかけるアイヌ・アート』179-211 第8章「メディアの中のアイヌ文化」	

1. 著者名 千葉大学アイヌ語研究会（編）・中川裕（監修）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 千葉大学ユーラシア言語文化論講座	5. 総ページ数 177
3. 書名 沼田武男「探訪帖」 十勝方言アイヌ語テキスト集	

1. 著者名 中川奈津子・木部暢子編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 国立国語研究所	5. 総ページ数 82
3. 書名 青森県八戸市方言調査報告書	

1. 著者名 Teruaki Oka, Yuichi Ishimoto, Yutaka Yagi, Takenori Nakamura, Masayuki Asahara, Kikuo Maekawa, Toshinobu Ogiso, Hanae Koiso, Kumiko Sakoda, Nobuko Kibe	4. 発行年 2020年
2. 出版社 LREC	5. 総ページ数 7251
3. 書名 Proceedings of the 12th Edition of its Language Resources and Evaluation Conference, " KOTONOHA: A Corpus Concordance System for Skewer-Searching NINJAL Corpora "	

1. 著者名 風間伸次郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京外国語大学	5. 総ページ数 180
3. 書名 『エウェン語ビストラヤ方言テキスト3』ツングース言語文化	

1. 著者名 風間伸次郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京外国語大学	5. 総ページ数 371
3. 書名 ソロンの文化と生活 2	

1. 著者名 風間伸次郎・菱山湧人（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京外国語大学	5. 総ページ数 626
3. 書名 チュヴァシュの言語と文化 1	

1. 著者名 風間伸次郎・山田洋平（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京外国語大学	5. 総ページ数 154
3. 書名 ダグールの言語と文化 1	

1. 著者名 風間伸次郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京外国語大学	5. 総ページ数 189
3. 書名 ナーナイ語諸方言の研究3	

1. 著者名 鈴木博之・倉部慶太・遠藤光暁編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies	5. 総ページ数 189
3. 書名 東部亞洲地理語言学論文集	

1. 著者名 Hiroyuki Suzuki, Keita Kurabe & Mitsuaki Endo (eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies	5. 総ページ数 57
3. 書名 Papers from the Workshop “Phylogeny, Dispersion, and Contact of East and Southeast Asian Languages and Human Groups”	

1. 著者名 青井隼人・木部暢子[編]	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所	5. 総ページ数 65
3. 書名 青森県むつ市方言調査報告書	

1. 著者名 木部暢子・山本友美・麻生玲子・新永悠人編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 国立国語研究所	5. 総ページ数 96
3. 書名 椎葉村方言語彙集中間報告書 仲塔・松尾編	

1. 著者名 麻生玲子・山本友美・木部暢子編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国立国語研究所	5. 総ページ数 115
3. 書名 椎葉村方言語彙集中間報告書 上椎葉・尾八重・鹿野遊・大河内編	

1. 著者名 青井隼人・木部暢子編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国立国語研究所	5. 総ページ数 193
3. 書名 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 木曾川方言調査報告書	

1. 著者名 Satoko Shirai & Mitsuaki Endo, eds.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ILCAA, TUFS	5. 総ページ数 85
3. 書名 Studies in Asian Geolinguistics, 8	

1. 著者名 Hiroyuki Suzuki & Mitsuaki Endo, eds.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ILCAA, TUFS	5. 総ページ数 176
3. 書名 Papers from the Fourth International Conference on Asian Geolinguistics	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木部 暢子 (Kibe Nobuko) (30192016)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・大学共同利用機関等の部局等・名誉教授 (62618)	
研究分担者	狩俣 繁久 (Karimata Shigehisa) (50224712)	琉球大学・島嶼地域科学研究所・客員研究員 (18001)	
研究分担者	風間 伸次郎 (Kazama Shinjiro) (50243374)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	中川 裕 (Nakagawa Hiroshi) (50172276)	千葉大学・大学院人文科学研究院・教授 (12501)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 中央民族大学2019年中国民族語言地理語言学沙龍	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Workshop on Phylogeny, Dispersion, and Contact of East and Southeast Asian Languages and Human Groups	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 第一回日本地理言語学会大会	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Meeting of the Linguistic Group of Yaponesian Project, MEXT	開催年 2020年～2020年

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------